

太田渟子集

第二卷 人間檻樓

大田澤子集

第二卷

大田洋子集 第二巻

1982年 8 月 31 日 第1版第1刷発行

著 者 大 田 洋 子

© 中川一枝 1982年

発 行 者 菊 地 喜 三 次

印 刷 所 誠 和 印 刷 株 式 会 社

製 本 所 東 京 美 術 紙 工

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 03 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番

振 替 東 京 9 - 8 4 1 6 0 番

郵便番号101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

Printed in Japan

大田洋子集 第二卷／人間檻樓／目次

人間檻樓 ^{らんる}	5
海底のような光——原子爆弾の空襲に遭って——.....	275
一九四五年の夏.....	281
『屍の街』序.....	299
作家の態度.....	307
生き残りの心理.....	313
文学のおそろしさ.....	321
行進——死者の魂への共感——.....	325
十五年たったというけれど.....	329

ノイローゼの克服 333

母の死 341

解説 長岡弘芳 345

解題 浦西和彦 356

題字・装画〈原爆の図〉 丸木位里・丸木俊

装丁 岡島茂夫

大田洋子集 第二卷／人間檻樓

本集に収録するに際して、各作品の漢字は新字体に改め（俗字・宛字は原文のまま）、仮名づかいは現代仮名づかに統一し（送り仮名は原文のまま）、促音・拗音は小字で表記した。

人間
檻^{らん}
樓^る

もしも絶対の真実が人間を支配
するに至るものとすれば、忽ちに
して何という驚くべき進歩が実現
されることだろう。

一章 一九四五年夏

1

真夏の朝の瀬戸内海は、さすがにさわやかな緑色の輝きをきらめかせていた。陽に光る白いさざ波を、劈くように鋭い音を立て、三艘のジゼル・ヤンマー船が走っている。海面は瀬戸内海特有の、天鵞絨じみたきめのこまかい青さや、淡い葡萄色や、濃淡の碧や、ときには薄い黄いろなどの、色の変化をとろりと漂わせて、ゆったりと大きくひろがっていた。ジゼル・ヤンマーはこの陽に光る海を小刻みに裂くような烈しい騒々しさで、がたがた震えながら走った。毎朝これだからやりきれない。二十一歳の杉太は、部厚な若い尻を突きあげてくる檻襦袢船の、氣狂いのような推進機の打撃に、かつと眼をひらいて、遠くに見えて来た緑色の銀輪島かまどをじっと見詰めた。

杉太の眼に、あるかなしかの怨嗟の影が沈んでいる。なんのために、若い学生の集団が毎朝はよくあの島に運ばれて行くのか。

不思議な労働に、学生や女たちまで狩り集めている銀輪島は、何気ない緑の姿を夏の朝の海に横たえているのだった。土着の百姓や漁師を近くの島々に分散させ、いまは暁部隊の一単位として六一四

○部隊がそこに住みついていた。六一四○部隊は造船を主体にし、船関係一般の仕事をしているが、もはや戦争の最終時期に来ていたから、どうかすると防空壕を掘ることが、その島でも仕事の主体になりかけていた。

海軍の艦棲軍艦をもって来て、航空母艦に改造したり、海軍の教えない陸軍用の潜水艇を造ったりしてはいたが、一つの軍隊としての個性はいつか失いかけているのである。島蔭には擬装した穴だらけの航空母艦がおいてあった。一度も戦闘をしないで、しかも穴だらけの航空母艦は、出来上りもしないまま、部隊から見捨てられでもしたように、ひっそりと島蔭に身をかくしていた。島の小高い場所のところどころには、対空戦の準備として、高射機関砲が据わっていた。周囲五里の丸味を持ったこの島を根拠に、十トンしか積めない陸軍の潜水艇や、海軍から借りて来た上陸用舟艇のS・Bが、豊富な軍需物資を積み、瀬戸内海を駆けめぐっているのだった。

舟艇は、巖島^{いづしま}を連絡場所として、海上のあらゆる島々、似之島^{にの}や絵の島、能美島の裏手から裏手に、隠匿物資を運ぶため、蟻のように動き廻っているのだ。

銀輪島には種々雑多な人間が集められていた。僅かな佐官連中や、高級副官もいるが、尉官達の下に、普通の労働者と違わぬ船舶兵や、一般徴用者や、学徒動員兵や、その上、徴用された女たちの集団が、寄せ集められているのだった。船舶部隊には相違ないが、島の地上に集められている彼等は、島流しの囚人のように、苛酷な労役に服していた。横穴掘りや道路直し、隠匿物資を入れる倉庫作りや穴掘りに、学生や女まで人夫のように働いた。

大勢の一般徴用者の中には、手首から腕、腕から背に入れずみのある鉋夫あがりの男なども幾人か

いた。その中に企業整備で止むなく芸者を廃業した女、未婚の娘、徴兵適齢に達していない少年などが大勢交っていた。

山川杉太たちを乗せたジイゼル・ヤンマー船は、このような島に向い、狂ったようにひた走りに走っているのである。杉太は自分の眼に、銀輪島の緑の色が沁みいるような気がした。島はぐいぐいと近より、海上の学徒兵は否応なくその島へ向って引き摺られていた。杉太は、さつきから自分の胸を襲っている吐気のような厭悪感を、なんのためかと思った。

厭悪感は銀輪島に近づくに従って、胸底まで滲むように拡がり、その感情は、苦い液体になって咽喉に突きあがってくるかと思つた。杉太は今朝ほど、銀輪島に行くのをいやだと考えた日は、かつてなかったことに気づいた。彼の頬は瞬間、血走るように熱くなつた。杉太は思わず左手の大きな掌を頬にあてて見た。熱感をかんだのは昨日の昼のことで、いまはもう熱くはない筈だった。そのくせ他人の手掌の生々しいショックが、感情的な灼熱感を頬にのこしている。

「どうかしたんか」

向い側にしゃがんで、船の劇しい動揺に、全身をあやつり人形のように振りうごかしている友達がいいた。

「どうもせん」

杉太は無愛相に答えた。昨日の真昼のある瞬間に起きた、馬鹿々々しく不快な出来ごとを、兵隊たちも一緒に乗っているこの船の中で、杉太は友達に語ることも出来なかった。頭のなかを通りすぎる田村菊江の顔を、杉太は暫くじっと見送った。田村菊江の顔ははつきり眼に浮ぶのに、同じ場所に

いて、自分の頬を打って来た黒河中尉の顔は、ど忘れしたように、鮮やかさを欠いている。しかも昨日のあの一瞬は、鮮明な一枚の絵になって、杉太の頭に甦った。あの野蛮な、残忍な掌の襲撃は、なものに依って黒河中尉の心に許したのだろうか。

女のからだから離れた手を、いきなり山川杉太という一学徒の頬にもって来て、火花が散るほどの一撃を加えた黒河の心情が、杉太には充分了解できなかった。昨日の朝も杉太たちは、師範学校の寮を出て、学校の裏の川岸に集り、軍隊の作った船着場で、自分たちを迎えにくるジイゼル・ヤンマーの兵隊を待っていた。息ぐるしいほど暑さのはげしい朝だった。

昨日の朝も兵隊たちは三艘のヤンマー船を持って、一刻も間ちがえず彼等を迎えに来た。昨日と同じように今日も運ばれているのだ。そして昨日の朝は、今日ほどの厭悪をあゝの島には抱いていなかった。

正午を二時間も廻った時刻から、瀬戸内海に独特の重苦しく、圧しつけるような夕風がはじまった。ぴたりと風がとまって、そよりともしない夕風の、蒸されるような暑さに、杉太は丘の裾に大きな口を開いている防空壕へ、逃げ込もうとしたのだった。防空壕はいつも涼しく、ひんやりとしていた。しかし杉太のはいり込んだ防空壕は、生憎、将校連中の専用の壕であった。杉太は丘を廻って見て、人気がない壕を物色し、安心してその一つの丘をくりぬいた横穴へ一足はいつて行った。

とたんに「待てッ」という幅の広い男の声が、杉太の耳に鋭く流れて来た。その異様な鋭さに、杉太は却ってはつきりと壕の中の情痴をじろっと見てしまった。待てといわれても待つことのできない、匂うような、一組の男女の愛慾が、ひんやりした壕の黒土に横たわっていた。この種の密会は珍らし

いことではなかった。壕のなかで女のからだを抱いている将校の顔に、杉太は格別おどろきはしなかった。驚くのは黒川中尉の眼の変化の速度と、もう一つ菊江の顔に現れた一瞬の表情とであった。土の上にならずまき流れている菊江の髪に熱心に注がれていたときの、中尉の幸福な、ものやさしい眼ざしが、杉太を眼にした瞬間、残酷な眼つきに変った。その変り方の速さに、杉太はびっくりした。彼は杉太の姿を見た一瞬、戦争に奉仕している自分に気づき、自己の位置に気づいた。そのためにこの島に來ているのだという反省につきあたったのだ。黒河は、壕の入口を四五歩も離れ去った杉太を、うしろから追って來た。

「なにをしに來たんだ」

「あんまり暑いので、ちょっと涼みたいと思つて來ました」

「ここは貴様たちの涼みに來る場所じゃあない」

杉太は初めから顔を伏せていた。なにごとかを予感したし、覚悟していた。黒河の手は杉太の予感のとおりになり、矢庭に鋭くのびて、杉太の頬をなぐった。杉太は泥棒猫のようだと自分からその心理に落ちて、こそこそと逃げ出したが、足下の夏はぜの深紅色がくつきりと眼にうつると、菊江の顔に現れたさっきの利根的な表情が、自分の肌に刻みつけられているのを自覚した。

菊江の顔には、黒河の腕から解き放されると同時に、一種の安らかさと同様に、なんとも知れぬやさしい微笑が現れた。くつろいだ、落ちつきのある、正直な微笑は杉太の顔へも注がれたのだ。二十二歳の娘の表情に、大人びた微笑が浮び、陽に焦げた若いその顔がある確かな安定を保って潤い光っているのを、杉太は黒河の顔つきと見比べて驚いたのだった。しかし杉太はそのとき、菊江の顔

の不思議な完成が、どのようなことを意味しているのかよくわからなかった。

杉太にとって菊江という娘は、加治多保子の友達という意味でだけ、心の内側に小さくしるされていた。加治多保子は大胆な明るい眼つきで、島で働く時間中、杉太の視野のなかに生々と浮彫りされていた。彼女は女学校の生徒だったころ、同じプールで幾度か杉太と一緒に泳いだことのある娘だった。

中等学校のころ、互いにすぐれた水泳選手だったこの二人は、銀輪島で偶然に出会った。この春、杉太たち師範学校の二部生の一団は、前にいた学徒兵の連中が戦場の各部隊へ、離れ離れに出て行ったあとへ、入れ代りに連れて来られたのだが、その頃すでに加治多保子は島に来ていた。

「あんたの顔を見たときに、また泳ぎたい、泳ぎたいの虫が、おなかの中で泳ぎはじめた。海にとび込みたくて仕方がないん。だけど私みたいなのも挺身隊員の一人でしょ。足の先きも海へはいれないんよ、ここではとっても不自由」

不敵な表情で、潮風に染まっってうす桃色になった顔に、苦笑をただよわせ、言葉はあどけなく杉太に話しかけた。

「夜中にふたりでこっそり競泳しようか」

「だめ。だめよ。六一四〇部隊は、無比死魂部隊って、自分でそう云って威張りきっているし、夜中でもなんでもS・Bやマルユやあの気違い船のジーゼル・ヤンマーが、海上狭しと走りまわっているもんね。どうにもなりはせんわ」

「ここへ来てから、一度も泳いだことはない」

「ええ、一度も」

「なにをしとるんの、この島で。女子挺身隊は」

「それが問題なん。真面目な者は、女のくせに土方みたいな土運びや、道路修理や、穴掘りに使われているん。タイピストや事務員もいるけど、そういうのは、お妾と紙一重よ。ここでは女たちを二重に利用しているん。悪用よ。ほら、あれを見てみなさい」

島へ運ばれてくるようになってから、まだ日の浅い山川杉太に、多保子は先きに來た自分の知っていることを、一つずつ話したい様子をしていた。数本の赤松の樹の間から杉太は多保子の眼を上げた方向を見あげた。三方を丘陵で囲まれた小高い盆地に、この殺風景な島では、際立って堂々と見える和風の建物があつた。軍隊の建物とも見えぬ、小粋なその木造建築はまだ新しく、しっかりと木組みを見せていた。別荘とも料亭ともつかない新しいその家では、毎日のように将校や高級副官たちの会議がひらかれている。

杉太は感動のない冷静な眼で、暫くそちらを眺めていた。やがてかすかな微笑が杉太の赤黒い頬を流れた。

「ね、それで兵舎は鉾山の飯場みたい」

多保子は弾んだ声で云い、紺紺の防空服につつんだ、潑刺とした自分の軀を、はね返すような勢いでひるがえし、海の方を向いてしまった。とりととした青い海に、強烈な夏の陽が照り映えている。そして木造のヤンマー船や、鉄舟のS・Bや、大発、小発の潜水艇が入り交り陽の光の斑点を蹴ちらして、海面いっぱいをくるめくように駆けていた。

「徴用で来ている女たちのなかにね、あすこで泊って行くのがあるというのは、ほんとうなんだろうか」

杉太も丘陵の建物に背を向け、海を見ていた。

「ええ、そうよ」

多保子は、ぼッと頬を赤くした。

「なにかと云えば会議があつて、それからどんちゃん騒ぎだもん。もとの芸者なんかその席にはなべるけど、どうかすると女子挺身隊員もはんべるといふ噂があるん。うちはよく知らないわ。でもひそかに泊るひとのあることは知っています。そういうひとは、豚のたべるようなこの食事をしなくてもいいもんね。とにかく私ら、島にしばらくつけられて、悪用されている気しかしい。でもきつと戦争には勝つ。勝つわね」

「敗けないよ」

杉太は赤松の間を歩きだした。樺色の粗末な作業衣、戦闘帽、馬蹄靴に身をかためた杉太の、岩乗な背の高い軀いっばいに、焼けつくような夏の光線がきらきらと光っていた。

雑草の小径が二つにわかれているところまで来ると、杉太は並んで歩いている多保子に

「いつか泳ぎましょう」

と笑いかけ、多保子を先きにやって、自分は反対の道へそれて行った。子供のころ、同じプールでよく一緒に泳いだという、その追憶が、杉太の心をあたため、多保子の四肢に親近感をおぼえさせたが、杉太はもはや自分たちが、ふたり並んで泳ぐ日があるうとは思わなかった。水泳選手として延び